

会 報

第 1 1 号 平成 3 年 9 月 25 日発行



富山城

“ブレイン・ストーミング”

同窓会長 平 田 卓 郎

38年前、第1回生の私たちが卒業したころは、わが国は敗戦後であり、貧乏そのものであった。

この貧しかったわが国が、いま、豊かな繁栄した大国になったのは、多くの大学、とりわけ、理工系大学の出身者が、安全で、安価で、しかも美しい各種有用な資材と製品をもりもりと、つくってきたからである。

外国人の何倍の改善と努力したからで、世界のどちらへもっていても安心して供給でき、次第に、経済大国へと成長してきた。

その原動力には、各大学各学部同窓会員が、相携えて協力し合い、お互いの領域分野を限りなく発展させてきたことによる。

先輩・後輩のたて糸と、同輩というよこ糸が合い織りなしてこそ、立派な織物ができるのである。ところが、その絶好の機会として、同窓会懇親会がある。多数の会員諸賢がお誘い合わせのうえ、ご参集いただき、より盛大に楽しくご歓談のほどお待ちいたします。

楽しく、おもしろい言葉に、オズボーンの“ブレイン・ストーミング”というのがある。訳せば、「脳あらし」の意味で、QC活動や創意工夫のさいに、好んで用いられる言葉の一

つであることは、ご周知のとおりである。

私なりに、困ったときに、わかりやすくするために、ブレインの①ブは、できるだけ多くの分量を考えるとすることで、ローソクは人工衛星の中では空気の対流が起こらず燃えないのではないかと。マッチはすったときに燃えても、あと消えるのではないかと。ライターは噴き出すので燃えつづけるのではないかと。このように、燃えるということでも色々な場面をたくさんの分量を考える。②レは、物事を連結して考える。たとえば、原子はどうなっているか。原子は玉ねぎを割ったようなものか。あるいは、じゃがいもを切ったようなものか。太陽系のようなものか。色々と連想して考える。

日本三景には、松島・厳島・天の橋立がある。なぜか、松林や島々はどこにでもあるが、連結したものが絶景となる。鳥居と海面、景観と送見とのそれぞれ連結であろう。

何でも普通のものでも連結すると全体が立派になる。③ストーミングのスは、すべてを推奨すること、せっかく多くの意見を聞きたいと思っても、先に「だめだ」といえば、よい意見もでてこなくなってしまう。プラスとマイナスの電気はなぜ引き合うのか。リンゴはなぜ落ちるのか。どうして万有引力があるのか。電子の中がどうなっているのか。と、聞かれたとき、答えられずに、そうなっているのだなどと怒ってしまう。「それはよい質問だ」「それを調べたらノーベル賞かもしれないぞ」といえる雅量と推奨が必要であろう。ストーミングの④トは、突拍子もないことを考えつくこと。月が1日5回自転すれば、月は暖かくなり、 $\frac{1}{6}$ 気圧の酸素があれば人間が住めるかもしれないといった人がいる。

湯川先生の中間子理論もボーア先生に話した時は、ボーア先生は、突拍子もないといわれたが、今日では確立された理論となった。アインシュタインの相対論、エジソンの数千の発明も、皆しかりである。最後の⑤ミは、未来はどうなるかというアイデアをもつこと。分子・原子・核・核子・中間子・クォーク・電子さらに、さらに細かく未来はどうなるかを次々と考えることも発展できて、また、楽しい。

ブレイン・ストーミングをすることによって、研究開発に、発想に、おもしろくなってくるのである。

ここに、真剣に職務にご尽力なさっておられる同窓会諸賢の皆さんが、未来に向かって、ますますのご発展のほどを願てやみません。

理学部同窓生の皆さんへ

理学部長 松本 賢一

理学部同窓会が、今年38年目を迎え会員数3,500名を超し、社会に益々大きく貢献していることを、お慶び申し上げます。

同窓会役員の御尽力に負う会員名簿が、改訂のたびに、厚くなり正確になってゆくのは大変悦ばしくそして力づけられることです。普段はあまり手にしない会員名簿ですが、昨年は、平成2年度物理学科職業補導委員だったことで、随分重用させていただきました。おかげで、物理学科同窓生の就職状況を念頭におきながら、数年前から万

来となった求人来訪者との応対ができ、また、来訪者から同窓生の現況を教えられるといったボーナスもありました。

さて、この38年間の理学の発展は素晴らしく、達成された宇宙・物質・地球・生命・情報と数理等に関する成果は、学べば目開かれ心満たされる程で、この間の人類の最大の文化的達成の一つと思っています。理学のさらなる発展のため、富大理学部は、今後も、応分以上の寄与をしていきたいものです。

理学は又、近年、先端技術開発の基礎としてその主導的役割を果たすようになり、社会に大きく貢献すると共に、産業との関係を強めています。それで、理学部がその実現を強く望んできた大学院理学研究科博士課程について、最近博士課程の目的に「すぐれた研究者の養成」以外に「高度の専門的知識と能力を持つ職業人の養成と再教育」がつけ加えられたのをうけて、後者を目的とした一在職修学や社会のすぐれた人材の研究科への参加等を織り込んだ一構想を進めることにしています。

● 今、大学は、新制大学発足以来といわれ

る大改革—一般教育の改善を要とする教育と組織の改革、18才人口の減少の到来への対処、生涯教育やリカレント教育への寄与、自己点検・自己評価の実施等—の課題に直面しています。富大も、小黒学長（前名誉会長）のもと、この課題の全学的検討に入り、理学部もこの課題に前向きに応えるべく取り組んでいます。

思いつくまま、理学部同窓生の「ふるさと」、富大理学部の近況などを書かせていただきました。時に「ふるさと」に思いをはせて下さるよう願うと共に、皆さんのご健勝と同窓会のご発展を祈っています。

ご あ い さ つ

理学部教授 川 井 清 保

“ありがとうございました。”——‘自分の研究室’をつくりたくて富山に移ってきたのが昭和38年の秋。日を経ずして、まともにそれをつくる能力があるなどは思い上がりも甚だしいことを私は悟った。振り返れば、以後のこの27年余りは、多くの方々のご支援とご寛容に支えられての歲月そのものであった。この機会にあらためてお礼を申し上げさせて頂きたい。‘皆さん、ほんとうに有り難うございました。’

● “富大生は活躍する力をもっています。”——昨年の後半、肝臓移植をうけた幼子が、関係者必死の努力の甲斐もなく、相ついで亡くなる悲しいニュースがあった。天命と言うにはあまりにいたましく、もし自分の子であればと思いを馳せて冥福を祈った。一方、全身に大火傷をしたけれども幸に治り、関係者のみならず私達までが安堵し、喜びをわかちあえて、人の心に国境のないことを改めて感じさせた朗報もあった。後者の場合、その坊やに運と生きる力があつたからであろう。同じ頃、卒業生の一人から、博士論文ができました、と別刷が送られて

きた。理学部構造化学研究室にとっては11人目の、それも学部卒だけのドクターである。ドクターを特別視するわけでないが、これも‘富大生の能力を証明する事例の一つである。’と私は研究室の諸君に話した。勿論、学術研究とは縁のない分野で素晴らしい活躍をしており私の誇りにしている諸君も多い。みんな、少なくとも私からは先生らしい指導は何も受けていない人達である。先生の指導が足りなくても富山大学の学生は社会で立派に活躍していく力をもっている。27年間を学生諸君と共に暮らしてきたの実感である。

“私は幸せでした。”——自分の思い上がりで先生になり、学生諸君に胸を張ってこれと言えらなことは何もできなかったし、多くの諸君に迷惑をかけてきた。にも拘らず、互いに人生を彩りあえる多くの卒業生諸君に恵まれて、私はいま‘富山で先生の道を選んで幸せであった。’と感謝している。同時に、今春卒業する諸君をはじめ皆さんの活躍で富山大学がさらに発展していくことを願っている。

◆新学長に小黒千足教授

大井信一学長の任期満了の後を受け、6月13日付けで、第9代学長に就任。

釧路市出身。60才 大山町在住。

昭和28年北海道大学理学部卒業。昭和41年富山大学文理学部に着任62年より理学部長。

専門は比較内分泌学、動物系分類学。

◆理学部同窓会の現況（1991年5月1日現在）

○通常会員数	3,502名
文理学部理学科卒業生	1,780名
平成2年度理学部卒業生	182名
平成2年度大学院理学研究科修了者	1名
（学部外出身者のみ）	

○準会員数（在学生）	961名
理 学 部	893名
大 学 院	68名

◆理学部同窓会特別会員の異動

○停 年 退 職

H3. 3. 31 川 井 清 保
構造化学 教 授

○採 用

H3. 4. 1 櫻 井 醇 児
固体物理学 教 授

H3. 4. 1 黒 田 英 世
環境生物学 助教授

H3. 4. 1 平 井 美 朗
天然物化学 助教授

H3. 4. 1 小田島 仁 司
電波物理学 助 手

◆平成3年度富山大学理学部同窓会役員名簿

名 誉 会 長	松 本 賢 一（理学部長）		
会 長	平 田 卓 郎（1化）		
副 会 長	石 川 克（1数）	高 桑 昇（2生）	
常 任 理 事	阿 部 幸 隆（2院数）	近 堂 和 郎（7物）	森 田 裕 之（14化）
	岩 坪 美 兼（26生）	笠 原 一 世（27化）	

発 行 富山大学理学部同窓会 〒930 富山市五福3190

富 山 大 学 理 学 部 内

TEL（0764）41-1271内線2291

会 報

第12号

平成4年7月20日発行



みくりが池と立山主峰

啐 啄

同窓会長 平田卓郎

近ごろ、人口孵卵器によって生まれた鶏は、古の昔から伝承されていた「啐啄の機」を経験していないのは、とても残念である。野性の鳥なら知っている。40年ほど前、私の小さい頃には、鶏は放し飼いになっていた。5羽ほどいると1羽ぐらいは、突然、腹の羽毛が抜けて、そこが熱くなり卵をうむどころか卵を全部抱えこむのである。冷水でいくら冷やしても効果がない。

4週間後、朝の静けさに、卵そのものが内側からコツコツと音がするのである。まことに感動的であった。

卵の中から、ひよこが殻を啐（つつ）いて鳴いているのである。これが啐（そつ）という字である。その同じ部分を、親が外から啐（つつ）いて破ってやるのが啄（たく）である。この時、ピヨピヨと、かわいいひよこが顔を出し、この世に出てくる。

この呼吸合わせの時機を「啐啄の機」という。私のよく使う好きな言葉の一つである。親鶏の啄が、早過ぎて遅過ぎていけないのである。わが子の成長につれて、今何が必要か見極めながら、先輩と後輩の関係もまた同じである。先輩と後輩が一体となって、積極的に学力、業績を磨くことが大切である。

意欲ある若者には、甘やかす時機は去っている。毎日毎日、努力するものには、業績が集積し、勤勉なるものは、すばらしい人格を磨く。同窓会諸賢は、お互いに一層研鑽され、来年の40周年記念祭を新しい節目とし多数相集い、盛大に開催し、会員諸賢が相携えて、今後ますます活発に発展されるように願ってやみません。

富山の5年間

理学部教授 赤羽賢司

児島先生（現名誉教授）に安請合をしたまま、赴任してみて、学生の授業だけみても、先生の仕事がいかに大変であるかが、分かって来ました。5年もかかってようやくなんとかしなくてはと思うようになった所です。つまり身に余る大任でした。前任の大学では、大学院の学生しか知りませんでした。私はここでは、電磁気学を担当しましたが、電磁気学を習ったのは、40年も昔のことです。決められた教科書について、先づ自分が内容をよく理解すること、次にそれを学生に伝えることを順序立てて毎回繰り返して来ました。うまくゆかない時は、私は教えるテクニックがないからだめだ、などと思ったものですが、この頃になってやっぱり、事柄の内容を学生に伝えるには、授業の技術よりも、自分がどれだけ深くその事柄を理解しているのかの方が、遙かに重要であると思うようになりました。物理的にポイントになる内容を、平易な、分かり易い日常語で話し、先生の身体や身振りからその内容が匂い出すような授業をして見たいと思うようになりました。そのためには、やっぱり私の勉強がもっともっと必要であると思いながら、月日がどんどん経ってしまいました。うまく云えませんが、大学では自分の研究が進まなくても、只論文がかけないだけのことで、学生との指導的なやりとりは、失敗すると、とりかえしがつかないというような、どうにもならない気持ちがいつも心の底にありました。

研究面では、全くの無為無策で、只々惰性的に今までのやり残し（無理にそう思うだけ）のようなものを「いじり回した」だけでした。年令的なこともあったでしょうが、気がついて見ると、自分と同じような古めかしいことをやっている仲間が、世界中にも全く見当たらなくなっていました。30代の前半に、太陽活動域の研究のために手がけた、古い「物理」を乗り越えて、現在の新しい「物理」を身につけることが、どうしてもできないのです。その一つ覚え的な手法が「あてはまるかも知れない」観測テーマを宇宙に探すという、全く本末を転倒したやり方しかできませんでした。観測には、野辺山の共同利用施設を使わせて頂きました。記述的論文ばかりですが、4篇程研究誌に載せて頂くことができました。又富大では、「星間分子の高励起の研究」で科研費を頂き、メチルアルコール（ CH_3OH ）の分子を作っているCとOとの距離伸縮運動について、実験室での研究を常川先生方と行なうことができました。しかし、本当の成果はこれからで、500万円3年間の研究経費が、何やら講座の生活費のようなものに充当されて、後めたい気持ちを持っています。しかし、私のような独立性のないものが、富山で少しでも研究ができたとしますと、それは大学の職員であったからだと思います。やはり職業意識が先行して、研究を支えていたのだと思っています。つまり皆様方のおかげなのです。

宇宙に関係のあることを勉強したいという相談を、学生から屢々受けました。そこで、「物理学科に入ったのだから、4年間は物理をしっかりとやるのが大切です。余裕はない筈です。物理学は、宇宙を勉強するためにはその基本学問です。そして、よい成績で大学院に入れば、君達の熱意がある限り、指導の先生の御理解の範囲内で、宇宙に関係した勉強や研究もできると思います。」というのがいつも私の決

まった答えでした。

富山の自然をできるだけ、観るように心掛けて来ました。時々親切にお話を頂いたのは、植物は生物の増田先生、鳥のことは物理の飯田先生でした。学園ニュースの後表紙のキャンパス樹木、草木誌（小島覚先生、長井真隆先生）も、その度読ませて頂くのが楽しみでした。しかし読んだことを、直ぐに忘れてしまう悲しさをどうすることもできませんでした。工学部の古川の土手での「ひめおどりこそう」や「むらさきけまん」の大きな群落（？）が一年で大きく様子が変わることも観ました。同じ古川の「かるがも」や淋しい古洞池の「かもの大群」など。又「おおはくちょう」の田尻池には何回も通いました。温泉については、あまり立派でない温泉に何回も行くのが好きでした。富山の川には、夫々実に沢山のダムや発電所があります。中には赤さびたものもありましたが、それらが、谷間や、山合いの若葉や、もみじの中でとても美しく観えたものでした。

私事ですが、私は胸にペースメーカー入りの心臓疾患を持っています。富山赴任の時も、主治医は随分と危ぶんだものでした。しかし、本当におかげさまで、健康に原因した休講は5年間一度もありませんでした。本当に感謝しております。

—富山の皆さんありがとう—（学園ニュースNo75より）

お願い

理学部同窓会は、来年40周年を迎えますが、これをひとつの節目として何か記念になる事業を行ないたいと考えていますが、事務局では、どんな事をしたら良いのかアイデアがほとんど思い浮かびません。そこで、様々な所で活躍されている会員の皆様のお知恵を拝借したいと思います。こんな事はどうか、こんな事が良いのではないかなー、といったことが有りましたら事務局までお寄せください。出来れば、総会の席で熱い話を期待しております。

◆理学部同窓会の現況（1992年5月1日現在）

○通常会員数	3,681名
文理学部理学科卒業者	1,780名
平成3年度理学部卒業者	179名
○準会員数（在学生）	917名
理 学 部	917名

◆理学部同窓会特別会員の異動

○停年退職

H. 4. 3. 31 赤羽 賢司 電波物理学 教授

○採用

H. 4. 4. 1	細野 忍	情報数理学	助教授
"	鈴木 信雄	形態学	助手
"	長崎 宏之	レーザー物理学	助手
"	石岡 努	構造化学	助手

◆平成4年度富山大学理学部同窓会役員名簿

名誉会長	松本 賢一 (理学部長)	
会長	平田 卓郎 (1化)	
副会長	石川 克 (1数)	高桑 昇 (2生)
常任理事	阿部 幸隆 (2院数)	近堂 和郎 (7物)
	森田 弘之 (14化)	岩坪 美兼 (26生)
	笠原 一世 (27化)	



発行 富山大学理学部同窓会 〒930 富山市五福3190
富山大学理学部内
TEL (0764)41-1271内線2291

会 報

第13号

平成6年12月7日発行



“創設の偉業”をたたえる

同窓会長 平田卓郎



馬場はる女史

同窓会員のみなさん、お元気ですか？

富山大学の発足ごろ、昭和24年(1949)に、富山市蓮町にあった文理学部の会議室には、馬場はるさんと馬場正治さんの大きなお写真が2つ正面に掲げられてあったのを、いま、なつかしく思い出している。

これら写真は、文理学部の前身である旧制富山高等学校時代からの引き継いで掲げられていたものである。

そのころ、旧制富山高校高等科理科の生徒であった私も、この会議室で会合や行事があるごとに、写真からは温和な眼なごしで、われわれを見つめておられるような気がしていたものである。

近年ルーツをたどるということばを、よく耳にする。そこで、我が理学部の“生い立ち”をたどってみたい。

理学部のルーツは、旧制富山高等学校高等科理科から始まる。さらに、富山大学文理学部理学科をと

してのち、理学部として独立していることになる。

くわしくのべると、旧制富山高等学校は、大正12年(1923)10月に、前にのべた馬場はるさんの寄付によって創設されたものである。

富山大学は、昭和24年(1949)5月に、この旧制富山高等学校をはじめとして、そのほか、富山師範学校・青年師範学校、富山薬学専門学校、高岡工業専門学校を包括して設置され、それぞれ、文理学部(文学科・理学科・経済学科)、教育学部、薬学部、工学部の4学部で発足している。

文理学部の中の経済学科は旧制高岡高等商業学校の流れをくむものであり、昭和28年(1953)8月に、文理学部から分離して経済学部となった。

ここで、文理学部は、名実ともに、旧制高等学校高等科文科理科の流れをもつ文学科・理学科の2学科となった。

その後、文理学部の改組によって、昭和52年(1977)に、理学部が分離独立し、さらに発展して、大学院理学研究科の設置等へとなり、今日に至っているのは、周知のとおりである。

旧制富山高等学校の創設当時についてのべると、尋常科(4年制)と高等科(3年制)があった。尋常科は小学校から進むところで、高等科は旧制中学校から進学するところである。つまり、尋常科を終えて高等科へ進学するわけである。

高等科には、文科と理科があった。学制改革では、旧制高等学校のあったところでは、後にそれを母体として文学部や理学部が設置されている。なかったところには、一般的に設置されなかった。

また、富山大学では、一般教養は、蓮町にあった文理学部で行われ、主に旧制富山高等学校の文科理科の先生方で授業が進められていた。

旧制富山高等学校は、“岩瀬の高等学校”と通称呼ばれていた。それは、若い青春の向学の憧れの的でもあった。

ここで、旧制高等学校の創設について、近くに住んでおられる米田寿吉さんの話をもとにのべたいと思う。

馬場はるさんは、信仰心がとても厚い方で「何か世のため、人のために役に立つ大きな事をしたい。」そして、馬場家歴代の供養につとめたいと考えられ、県や各方面に相談しておられた。当時、富山県内には、旧制高等学校がなく、学問を志し、大学教育をめざす若者には大へん不利な状態であった。それでは、旧制高等学校を創設するために役立てたいということで、そのためにほとんど全額寄付することを決断されたそうである。今の金額になおすと、300億円をはるか以上であったといわれる。旧制高校卒業生の中には、「もしわが母校がなかったら、今日のわれわれがあっただろうか。これまで考えてみなかったが大事なことである。」とっておられる方もある。

馬場家は、享保年代(1700)から、岩瀬で代々海運業を営まれ、明治・大正時代に隆盛をきわめ、馬場気船として、独立系船主の中の大手の地位を占めておられ、数多くの事業を興しておられた。

大正8年(1899)に、馬場道久6世が38歳の若さで他界され、未亡人となられた馬場はるさんが、まだ、13歳の若い嗣子正治さんの親権者として、馬場家の責任者として仕事を一手に担われたそうである。

そのときは、ちょうど皇太子殿下(昭和天皇)の御成婚のときであり、御成婚奉祝記念事業として、旧制高等学校を寄付されることになった。

この旧制高等学校跡地は、富山大学文理学部発祥の跡地でもあり、現在、馬場記念公園となっている。公園入口には、文理学部記念石彫がある。また公園内には、旧制高等学校の記念像が建っている。残念な

がら、馬場記念公園でありながら、学校創設の偉業をなしとげられた馬場はるさんの像はない。

「馬場記念公園の歴史と自然を愛する会（米田寿吉会長）」では、この記念公園に、旧制高等学校、富山大学人文学部・理学部の創設の偉業をたたえて、馬場はるさんの記念像がほしいという話がもちあがっている。

同窓会のみなさんも、この機会にご賛同いただいて銅像の設置の実現に向けて、ご理解とご援助をいただきたいと願っている。

同窓会諸賢の今後のますますのご発展を祈ってやまない。

富山大学に思う

理学部教授 小嶋 學

第二特集「大学 ここが良い ここが悪い」とからめて、退官にあたり、何か思うところを書けとの編集子からの御依頼をうけたが、はたと私は困った。急にそのようなことを言われても、何も思い当たらないのであった。何も思い当たらないということは、富山大学には何も悪いところはなく、私にとっては、丁度、空気のような存在であるということになろうか。実にぴったり、私そのものになりきっていて、富山大学の存在感というか、富山大学に対する異質感というものを感じなくなっているせいではなかろうかと、いうことになる。そういう意味では、私にとって、この13年間は、本当にあっという間に、本当にあっという間に過ぎ去ってしまった感がある。しかし、私にとっては、あっという間の13年間であつたかもしれないが、その間、二回ヨーロッパに出張したり、また、合計5年間にわたって学外の会議のため頻繁に研究室を留守にしたりして、関係の諸先生方特に所属講座の先生方を始めとして、学生諸兄諸姉には大変な御迷惑をおかけしてきた。そして、実際は何一つ文句もいわれず、暖かく見守り自由に行動することをお許しくださってきた。先程、私は、富山大学は私にとって空気のような存在であると、いい気になって書いたが、それは私の思い上がりであって、実は、私の周りの方々の御協力の御蔭があつたればこそそのことであつたのである。私は、富山大学の内にあつても外にあつても、いつも富山大学という大きな掌の上で、のうのうと過ごさせていただいていたことに、初めて気付いた。そして、今は、富山大学は私にとって空気のような存在であり、善意にみちあふれた方々のおられる、実に寛容でおおらかな良い大学であるというふうに、言いかえるべきであると思っている。

私は正直いって、富山へきて幸福だったと考えている。それは、富山大学が上述のような良い大学であつたということと共に、良い自然環境にめぐまれているためである。私達の実験材料であるウニは、車で一時間ちょっと走った海岸で容易に採集できるので、こんな好都合はなかった。元来、山が好きな私にとって、こんなに嬉しいことはなかった。うす紫色にかすむ薬師岳から立山を経て剣岳へと連なる稜線をシルエットとして、濃紺の空をほのかな淡紅色から橙色に変え、そして、突如、光り輝く黄金色に染めて昇ってくる朝日を眺める感動は、なにものにも代え難いものであつた。一方、私が驚いたことは、富山の雪は一生懸命降るということであつた。富山の雪は霏霏として降るというより恣肆として降るといった表現のほうがふさわしいほど激しい降り方で降ることである。窓越しに見える教育学部の建物が、あたかも天から傾れ落ちてくるかのような雪片によって見えなくなる程の降りざまに、感嘆し、言葉もなく、ただひたすら立ち続け見続けたことが何度あつたことであろう。そして、雪が降りやんだ後の教育学部のパス

テルカラー調の建物を、私の大好きなユトリロの描くモンマルトルの雪景色と重ね合わせて眺めていたものであった。

最後に、改めて、この13年の間、暖かく見守っていて下さった諸先生方、学生諸氏、および、事務の方々にここから御礼申し上げるとともに、富山大学の益々の発展を祈念してペンを擱きたい。（学園ニュース№83より）

富山大学理学部同窓会名簿購入案内

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、本年度同窓会会員名簿を発行いたします。

つきましては名簿購入希望者は、同封の郵便振替用紙にて、代金を送付くださいますようお願い申し上げます。

なお、代金の送付なき人は、購入出来ませんのでご了承下さい。

敬具

締 切 日 平成7年1月31日

頒 価 1 部 3,500円（送料含む）

郵送予定日 平成7年3月末頃

発 行 富山大学理学部同窓会 〒930 富山市五福3190
富山大学理学部内

T E L (0764)41-1271内線2163



会報

第14号

平成7年7月14日発行

富山大学理学部同窓会

ごあいさつ

同窓会長 平田卓郎

爽快な夏がやってきました。

同窓会会員の皆さまには、いよいよご健勝のことと存じまして、およろこび申し上げます。

昨今の情勢の厳しい折とはいえ、同窓会総会懇親会に多くの同窓生が出席され、景気回復に向けて、しかも同窓会のより一層の活性化をはかるべきときが到来していると考えています。このことが、同窓会諸賢のお互いの発展にもつながり、うれしいことであります。

同窓会を発展させる事業としては、いろいろ考えられます。各位がよい知恵を出し合い、名案を呈出していただきたく、歓迎しております。

それには、まず会員相互の親睦をはかり、情報を交換しあい、わが後輩諸君の進路、就職等についても、お互いの便宜をはかりたいものであります。

在学中の後輩諸君は、準会員でもあり、先生方のご指導よろしきを得て、所属学会で、すばらしい研究発表を行っております。

これらを助成すべく、それ相応の研究助成費を検討したらいかがかと存じます。ご理解とご賛同をよろしくお願い申し上げます。

ところで、先般わが母校前身の創設貢献者である、馬場はるさんの顕彰碑をつくることについて申し上げましたが、近時各方面からの要請が強くなってきております。これらを総合して、次のように協議依頼をされたことをご案内申し上げ、ご理解とご協力をお願いいたします。

- ① 馬場はるさんの顕彰碑（胸像）を馬場公園内につくる。
- ② 平成7年10月22日に竣工除幕を予定する。
- ③ 建設費用は800万円～900万円を予定する。
- ④ 建設共催は、旧制富山高等学校同窓会、富山大学人文学部同窓会、理学部同窓会、富山市岩瀬地区住民とし、それぞれ経費を負担する。
- ⑤ 碑をつくる会を設立する。
名 誉 会 長 中沖豊富山県知事
名誉副会長 正橋正一富山市長 （馬場はるさんは富山市名誉市民）
会 長 高田秀穂旧制富山高等学校同窓会長
副 会 長 各同窓会長・代表
理 事 各同窓会副会長 理事若干
事 務 局 長 横田力旧制富山高等学校同窓会事務局長
- ⑥ 建設工事は、旧制富山高等学校同窓生、富山大学人文学部、理学部同窓生のなかの専門家に依頼する。

以上については、わが同窓会としても、この機会に、それなりの経費負担を予算化しなければならないと存じます。

会員諸賢のご賛同をいただいて、胸像の建設に向けて、ご協力できれば幸甚に存じます。

これらの経費負担については、各位から直接集めないで、同窓会の予備費などで賄うことを予定しており、よろしくご賛同のほどを重ねてお願い申し上げます。

そして、来る8月12日（土）のわが同窓会総会には、お誘い合わせのうえ、ぜひ多数の皆さまのご参加をお待ち申し上げます。

同窓会諸賢の今後ますますのご発展を祈ってやみません。

はじめまして

理学部長 風巻 紀彦

この度はからずも理学部長の重責を担うことになりました。どうぞよろしくお願い致します。はじめに、自己紹介をさせていただきます。

専門は、数学ですが、ご存じのように、数学にもいろいろ分野があります。若い頃から確率論の中でも特にマルチンゲールの理論の精緻な美しさに魅せられて仕事をしてきました。マルチンゲールについては殆どの方がご存じないと思いますが、公平なゲームの数学的モデルから出発した理論とお考え下さい。

次に履歴を簡単に述べますと、昭和15年11月北海道旭川市の生まれです。現時点で54歳になります。北海道教育大学（札幌分校）を卒業後、東北大学大学院理学研究科修士課程（数学専攻）に進みました。そこを修了後助手として東北大学に残り、昭和44年から2年間フランスに留学し帰国後助教授（教養部）を6年間勤めて、富山大学には昭和53年に着任しました。残雪の富山駅に降り立った時のことが、ついこの間のことのように思い出されます。

趣味は？・・・と聞かれると困るのですが、一応「映画と読書」と答えるようにしています。映画については、子供の頃から随分映画館に行きましたが、最近はあまり観ません。読書のほうは、外国の小説ではジャック・ヒギンズ、フレデリック・フォーサイス、ケン・フォレット、ロバート・ラドラムなど。日本では特に藤沢周平が大好きで大体読んでいます。

富山大学にまいりましてから17年になりますが、いろいろなことがありました。とりわけ、戦後最大と言われる今回の大学改革は、教養部を廃止し従来の教育システムを4年一貫教育に転換するもので、富山大学が全国の大学に先駆けて改革に着手したこと、その一つの結果として理学部に「生物圏環境科学科」という6番目の学科が誕生したこと、は最も記憶に残る出来事です。まだ教育改革3年目ですので、これから見直しの作業を経て改革の趣旨を望ましい形で実現していかなければならないと考えております。

若年人口の減少、価値観の多様化、情報化・国際化或いは高齢化社会の到来等々未曾有の変革期を迎えている我が国において、大学もまた大きな転換点に立っています。大学をとりまく環境は益々厳しくなっているように感じます。正直のところ、時の流れが緩やかであった頃が懐かしく思われてなりません。

このような時代の変化の中で、富山大学は4年後に創立50年という記念すべき年を迎えますが、これを節目として理学部を一層充実させていかなければならないことは当然のことです。理学部同窓会の皆様にもご理解いただき、これまで以上にご声援下さいますようお願い申し上げます。

◇理学部同窓会特別会員の異動

○退職

H 7. 3. 31	後藤 克巳	環境化学計測教授
〃	南部 睦	合成有機化学講師
〃	長崎 宏之	量子物理学 助手

○転出

H 7. 3. 31	鈴木 信雄	生体構造学 助手	金沢大学へ
------------	-------	----------	-------

○採用

H 7. 4. 1	栗本 猛	量子物理学助教授
〃	横山 初	合成有機化学助手
〃	石崎 泰男	地球進化学 助手
H 7. 6. 1	辻 瑞樹	生体構造学 助手
〃	松田 恒平	生体制御学 助手

◇平成7年度富山大学理学部同窓会役員名簿

名誉会長	風巻 紀彦 (理学部長)	
会長	平田 卓郎 (1化)	
副会長	石川 克 (1数)	高桑 昇 (2生)
常任理事	菊池 万里 (34数)	近堂 和郎 (7物)
	高井 正三 (21物)	米山 嘉治 (28化)
	蒲池 浩之 (37生)	
監査委員	寺田 龍郎 (12生)	水島 俊雄 (22物)

発行 富山大学理学部同窓会 〒930 富山市五福3190
富山大学理学部内
TEL (0764)41-1271内線2163



会報

第15号

平成8年7月10日発行

富山大学理学部同窓会

“偉業をたたえる胸像” たつ

同窓会長 平田卓郎

同窓会員のみなさん、お元気ですか？

平成7年10月22日は、私たち同窓生としてもひとつの記念する日でありました。

我が理学部のルーツの一つである旧制富山高等学校（理科・文科）の創設に格別の貢献をつくされた馬場はるさん（1886～1971）の胸像が、その日、母校の跡地富山市蓮町「馬場記念公園」に建立された除幕式の日でありました。

我が同窓会員のみなさんも、かなりの参加があり、盛大にお祝いました。

馬場はるさんはその生涯を公けに奉仕されることが、きわめて多く、特に学術振興のためにと多額の浄財を寄付され、大正12年（1923）に旧制富山高等学校を設立せしめられたのである。

さらに、小泉八雲（ラフカデオ・ハーン）蔵書「ヘルン文庫」も寄贈された。

これを受け継いで、昭和24年（1949）に発足した富山大学文理学部、のちに昭和52年（1977）に理学部・人文学部へと、ますます発展して、すぐれた人材を世におくっているといわざるを得ない。このように馬場はるさんの遺志は今後も長く連綿として続いていくのである。

このことに思いをいたし、崇高な恩義を顕彰するべく、今ようやくみなさんの念願がかなえられ、像となったわけである。

この像については、馬場はるさんに敬愛を捧げてこられた地元、東岩瀬町の方々、馬場記念公園の歴

史と自然を愛する会、旧制富山高等学校同窓会のみなさんの強い熱意があり、人文学部同窓会とともに総意をもって建立するにいたったものであり、まことに意義深く、嬉しいかぎりである。

「馬場記念公園」の名称とともに、名実ともに、「馬場はる刀自胸像」に接して往時の遺徳をしのびながら、ともどもに感謝のまことを新にしたいものである。

母校理学部・大学院理学研究科に在学中の後輩諸君も先生方のご指導よろしく、素晴らしい研究を行っており、これらをさらに促進し、博士課程の設置に向け、母校の発展に資するため、みなさんのご賛同を得て、毎年研究助成を続けたいものと存じます。よろしくご理解のほどをお願いいたします。

そして、来る8月10日（土）の我が同窓会総会懇親会にはお誘い合わせのうえ、多数の皆さんのご参集のほどをお待ち申しあげます。

同窓会諸賢の今後のますますのご隆昌を祈ってやみません。

わたしの研究室

数学的な香りはいかが？

田 中 純 子（理学部 数学科4年）

渡辺ゼミでは、二次元、三次元上の曲線と曲面についての性質を研究し、マセマティカを用いて実際に画面に表示するのが目標であります。

しかし、現状は研究とは程遠く、英語で著したテキストを日本語に訳し、内容を理解するので手いっぱいであります。数学がわからない以前に日本語がわからず、高校のときに、国語をもっと勉強すべきであったと悔やむこと数知れずであります。

ゼミ生が手こずっている中、たまにコックリと居眠りされるのがゼミの渡辺義之先生であります。お酒・タバコ・テニス・スキーなんでもありの先生は、「不良おじさん」と自称しております。一方、多方面にわたり造詣が深く、太刀打ちできません。お昼になると必ず同僚の先生方とテニスをされ、パワフルさは学生以上です。このパワフルさを維持するには、早寝早起が一番のようであります。

さてゼミのメンバーは、かしまし娘3人とそれとは対照をなす男性2人、そしてパソコンの使い手であります院生の方1人の計6人です。普段は女性勢力に押され気味ですが、10月の渡辺ゼミ恒例焼岳登山では、煙噴く頂上噴火口へ男性会員が目指したときは頼もしく感じました。一方、女性3人は延々とおしゃべりタイム。大自然の中でも女性の本質かしましさは変わらないようです。

今は11月、4月に1万円を出して買ったテキストも、約1/4 読み終わりました。残り後490 ページ。これを買わずにコピーしてもよかったのですが、数学科である以上、英語で著した数学の本を一冊ぐらい持っていては損ではないと思い、全員購入しました。さらには、黒い表紙の中の七色の曲面に魅かれたのかもしれない。

4月初、わけもわからず院生の方の見よう見真似で、曲面を画面に表示し、「ワイ出た出た」と、幼児のように手をパチパチたたいて喜んだゼミ生たち。

残り半年間で、さらに1/4 進め、表紙にある七色の曲面を、自分でプログラムして、端末機の画面に表示できればと思います。

そうすれば、数学的香りを味わった上で、卒業できるでしょう。（学園ニュースNo89より）



合成有機講座第二研究室

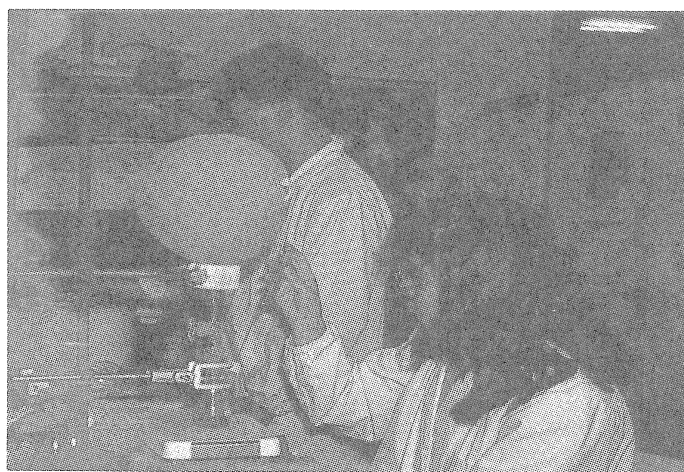
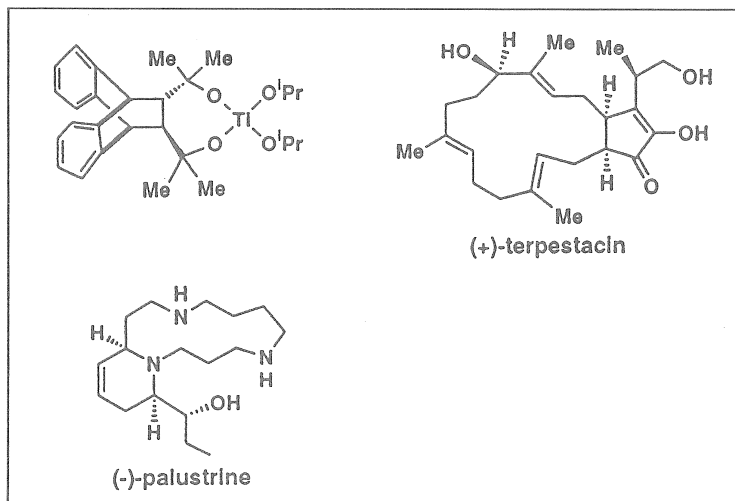
今井亮二（理学部 理科学研究科 化学専攻 1 年）

富大一厳しい研究室はどこか？という質問に対して、知っている人なら必ず、理学部化学科の合成有機第二研究室と答えるでしょう。研究時間は9時から10時が基本、もちろん1時間じゃありません。午前9時から午後10時までです。マスターの中にはほとんど毎日、日付が変わるまで実験する人もいます。時間が長いだけでなく、実験中にさぼってしようものなら容赦なく雷が落ちてきます。

ではなぜそんな厳しい研究室にみんな入るのでしょうか。それは授業での平井先生のやさしそうな顔と、山口先生の巧みな話術に、みんなだまされてしまうのです。先輩がいくらうちは厳しいと教えても、信じずに入ってくる人が毎年います。今年もまた、新4年生がたくさん希望するのを見て、我々は「だまされている…」と思わずにはいられません。でも私たち学生は、嫌々研究しているわけではありません。一人一人がそれぞれ自分の研究テーマを持っており、そのテーマは面白くて、やりがいのあるものばかりです。主となる研究は生物活性天然物の合成です。活性型ビタミンD、誘導体や、ピペリジンアルカロイド（パルスリン、シュードコンヒドリン、プミリオトキシシンC etc.）、海洋生物からとり出した複雑な構造の化合物などを合成しています。天然物の中には薬の原料となるものが多いため、これらを合成することができればたいへんな成果となります。また、遷移金属を用いた立体選択的な反応の開発も行なっています。本来、二つ以上の化合物が混ざって生成してしまうはずの反応に対して、適切にデザインされた不斉配位子を持つ、遷移金属等を用いて工夫することにより、好ましい一種類の化合物のみ選択的に合成しようという試みです。これらの研究は、どれも成功すれば画期的なものばかりで、私たちは毎日、忙しくも充実した日々を送っています。

先生は、あるときは仏様のようにやさしく、またあるときは鬼のように恐ろしい平井教授、女の子とチャレが大好きな山口助教授、そして厳しさの中にも厳しさを持つ、最も厳しい横山助手という超強力な3人が揃っています。我々学生も、この先生たちに負けないよう懸命に戦っています。若いときの苦労を買ってみたいという君、この研究室に来てみないか。

（学園ニュースNo90より）



総会ご案内

会員の皆様には益々の御健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、本年度同窓会・総会を下記の通り開催致しますので、ご案内致します。なにとぞ多数のご参加をお待ち致します。

尚、会場等の準備の都合がありますので、出欠の返事を同封のハガキで8月5日までに同窓会事務局までお送り下さるようお願い致します。

記

日 時 平成8年8月10日(土) 午後2時～

場 所 高志会館(富山市千歳町1-3-1)

TEL (0764)41-1776

会 費 1,000円

富山大学理学部同窓会

会長 平田 卓郎

◇理学部同窓会特別会員の異動

○退官

H 8. 3. 31 松本 賢一 量子物理学教授

○転任

H 7. 10. 1 大澤 力 反応物性化学助教授

○採用

H 7. 8. 1 和田 直也 生物圏機能助手

H 7. 10. 1 宮崎 隆文 反応物性化学助手

H 8. 4. 1 唐原 一郎 生体構造学助手

◇平成8年度富山大学理学部同窓会役員名簿

最高顧問 小黒 千足(学長)

名誉会長 風巻 紀彦(理学部長)

会長 平田 卓郎(1化)

副会長 石川 克(1数) 高桑 昇(2生)

常任理事 菊池 万里(34数) 近堂 和郎(7物)

高井 正三(21物) 米山 嘉治(28化)

蒲池 浩之(37生)

監査委員 寺田 龍郎(12生) 水島 俊雄(22物)

発 行 富山大学理学部同窓会

〒930 富山市五福3190

富山大学理学部内 TEL(0764)45-6123(代)